島根大学教育学部紀要（教育科学）第32巻　19頁～27頁　平成10年12月

生涯学習としての音楽教育に関する基礎的研究　III

吉名　重美*

Shigemi YOSHINA
Fundamental Investigation of Musical Education throughout One's Life III

［キーワード：生涯学習，音楽教育，ピアノ指導］

I．はじめに

この論文は，1992年から続けている生涯学習についての，ピアノ学習の高齢者向け教材とその実践記録の研究報告である。

前論文[1]の繰り返しになるが，人間の学習・成長は，一生涯継続することが可能であり，人間は本来，悟性・理性・感性によって，学習する動物であると考える。

生涯学習という概念が，人々の注目をあびるようになったのは，1992年に文部省高等教育局に，リフレッシュ教育についての係りが設置され，又1993年に国大協により，報告書が提出されてからであると思う。筆者はこれらのことから影響を受け，リカレント教育・リフレッシュ教育に関した音楽教育・研究を開始した。それ以前にも，ピアノデュオによる「心の共有」という観点からの研究を行った。その論文では，生徒・学生との心の核の存在・意義を持続的に情熱化することが重要と考え，教育・実践研究を論じた。

一方，学生を指導することが，我々大学に所属する者の指命であるが，教育学部が変革を遂げようとする今日，我々研究者は，音楽教育はどのような形で一般の人々に伝達すればよいか，いつも考えている。それは一般人の教育機関として，学生以外の人々にも高等教育を受益する立場が考えられる。

この論文では，これらの点も踏まえ，論究する。つまり，教育学部の今後の存在意義は，教員養成及び生涯学習の援助機関の両面が要求されていると考える。このような点からも，学生がピアノを学習することは，大学4年間のみでなく，その指導者となり，社会へいかにサービスできるかに関わってくると思える。その為の研究資料・教材はどのようなものが最適か，ここでその一端を論及したいと思う。以上がこの研究の動機の一つである。

II．「バイエルピアノ教則本」を用いた指導内容・研究及び考察*1

ピアノ学習者の使用した楽譜は，全音楽譜出版社の「子供のバイエル」である。この楽譜は，「バイエルピアノ教則本」の子供用として企画されている為，高齢者にも見やすい大きな字，音符で印刷されている。又上・下2巻に分けられている。

この論文では，「子供のバイエル」下巻（バイエル第44番～第106番まで，下記に示した番号では⑨から）の曲について，指導内容・研究をまとめる。指導内容等についての基本姿勢は，前論文を参照されたい。

II．1．指導内容・研究

「バイエルピアノ教則本」[2]は，以下のように構成されている。

第1部

①右手の指の打鍵練習，左手の打鍵練習，両手の共奏練習

②3手のための主題と12の変奏（生徒は右手だけを用いる）バイエル第1番（3手連弾）

③3手のための主題と8の変奏（生徒は左手だけを用いる）バイエル第2番（3手連弾）

④4手のための曲（生徒は両手を用いる）

＊島根大学教育学部音楽研究室

バイエル第３番～第11番（４手連弾）
⑤楽譜の範囲１点ハ音から１点ト音と２点ハ音から２点ト音　バイエル第12番～第31番
⑥３点二音までの楽譜の知識による４手のための曲
バイエル第32番～第34番（４手連弾）
⑦ト音までの楽譜の知識による両手練習曲
バイエル第35番～第40番
⑧３点ホ音までの楽譜の知識による４手のための曲
バイエル第41番～第43番（４手連弾）
⑨４手のための全音符から８分音符までの練習曲
バイエル第44番（４手連弾）
⑩８分音符の両手練習曲
バイエル第45番～第50番
⑪低音部記号。低音部記号と高音部記号の楽譜の比較
バイエル第51番～第62番
⑫４手のための８分音符の練習曲
バイエル第63番～第64番（４手連弾）
第２部
⑬やさしい音階，複音，臨時記号，３連音符，前打音等を含む両手練習曲　バイエル第65番～第85番
⑭16分音符を含む４手のための練習曲と指を早く動かす練習　バイエル第86番～第87番（４手連弾）
⑮８分音符，付点８分音符，16分音符等を含む両手練習曲　バイエル第88番～第104番
⑯半音階と半音階の練習曲
バイエル第105番～第106番

＊①～⑯の番号は，下記に述べるための便宜上の番号で，筆者が加筆したものである。

⑨４手のための全音符から８分音符までの練習曲（第44番）（４手連弾）

［指導上の留意点］
８分音符の音価の理解。音域の確認（右手は３点ハ音から３点ト音，左手は２点ハ音から２点ト音）。楽譜と鍵盤との位置関係の認識。
［学習上の難点］
・８分音符と４分音符の相対関係の理解が困難となる。
・楽譜と鍵盤の一致が不正確である。
［教育方法］
・学習者はバイエル第44番で初めて８分音符に接する。この練習曲は全音符→２分音符→４分音符→８分音符→４分音符→２分音符→全音符という形で，音価の比例を習得していく。音の長さを正確に区分しとらえていかなければならない。学習者は８分音符から４分音符へ移行する時，４分音符の音価が不安定になる。この理解には，指導者は学習者に下記の方法を行った。
数を数えながら演奏をする。学習者は声を出して，数を数えながら演奏することが苦手である。８分音符の演奏個所にくると，カウントも早くなる傾向があるので，学習者は「１－２－３－４－」と，指導者は「１と２と３と４と」と数を数え，学習者のカウント補助を行う。
指導者は先生用のパートを４分音符の和音演奏に変えて学習者の演奏補助を行う。８分音符から４分音符に移行の速度感覚が学習者の中で確実なものになってから，指導者は先生用のパートの演奏による連弾演奏を行う。
・学習者は音楽的基礎知識を持っている人である為，オクターブ記号（8va）の理解は早い。しかし，音域の再度確認の為，オクターブ記号をはずした音域で，右手のみの練習を試みる。

⑩８分音符の両手練習曲（第45番～第50番）

［指導上の留意点］
８分音符のレガート演奏。新しいリズムの理解。
［学習上の難点］
・８分音符の演奏が機械的になる。
・新しいリズム及び繰り返しの記号に接する為，読譜が不正確になる。
・集中力の保持が困難となる。
［教育方法］
・８分音符の演奏に対して余裕がない為，学習者は感情のない機械的な演奏を行う。音楽的に演奏することを心がけるという気持ちが薄れてくる。学習者自身はこの点を十分理解されており，以下のような感想を述べられる。
「４分音符の中に８分音符を２つ，正確に区分して演奏することは難しいと思います。自分自身，機械的に指を動かしていることを感じます。きれいに流れる旋律を味わいながら演奏することに，気持ちの余裕がありません。」
「右手左手と，別々に練習することを怠ります。」
指導者は①[1]で行った方法を再度試みる。
・付点４分音符と８分音符の組み合わせのリズム，新規の繰り返し記号（|1．　|2．　）がこれらの練習曲に出現する。楽典の理解度は早くなる。その反面，

読譜に対して注意が散漫になる。これらについて，学習者は以下のように述べられる。

「これまでの練習曲で，小節数の多い練習曲を勉強していますが，８分音符が使用されている為，演奏しなければならない音が多いと思い，とても長い曲のように感じます。その為，音楽的に又音を間違わないで演奏するということが困難です。」

「新しい繰り返しの記号には戸惑いを感じます。記号の意味は理解していますが，次はどこを演奏するのか，演奏しながら瞬時に判断するのが難しくなります。」

・指導者はこれらの練習曲から，和音演奏の導入を行う。同じような音型の練習曲が続く場合，学習者の練習意欲が衰える傾向が見える。分散型の伴奏が使用されている練習曲は，学習者の分散型の伴奏を，和音伴奏に変えて演奏することを指導する。この方法は，伴奏型を変えることによって生じる表情の変化を認識し，学習者自身のピアノ学習への創意工夫も生まれる。特に付点４分音符と８分音符の組み合わせのリズム練習に効果が見られる。その例として，バイエル第48番では左手を４分音符の和音演奏，次に付点２分音符の和音演奏を行う。練習初期の段階では，特に付点２分音符の和音演奏による伴奏では，付点４分音符の長さが不安定であったが，学習者自身が数を数えて演奏するようになると，付点４分音符の長さが正確になる。

⑪低音部記号。低音部記号と高音部記号の楽譜の比較（第51番～第62番）

［指導上の留意点］

拍子の理解（８分の６拍子，８分の３拍子）。演奏ポジションの確認。低音部記号の理解。

［学習上の難点］

・８分音符を１拍として数えることが困難である。

・左手の演奏ポジションの移動により，鍵盤と楽譜の位置関係の理解が難しくなる。

［教育方法］

・学習者は初めて，８分の６拍子と８分の３拍子の練習曲に出会う。

指導者はこれらの拍子の理解の為，８分音符を４分音符に書き換えた楽譜を作成し（４分の３拍子），拍子の理解を図る。同時に拍子の系（８分の６拍子は２拍子系のリズム）の理解につなげていく。これは後述の⑬で現れる３連音符の理解にもつながる。

・演奏ポジションの移動の勉強は，学習者にとって加線音の読譜の理解になる。ここで再度，加線音の音符と鍵盤の位置関係の復習を行う。音域の拡大への理解につなげる。

・これらの練習曲で，初めて低音部記号が導入されている。学習者は低音部記号による音符と鍵盤の位置関係の理解はあり，大譜表の理解につながっている。しかし曲の途中で音部記号が変わることには，戸惑いを感じている。練習初期の段階では，学習者はこの記号を見落として演奏することが多い。その為，指導者は音部記号に印を付け，その個所の近くを演奏する時は，学習者に

「音部記号が変わります。」

と注意を与える。

⑫４手のための８分音符の練習曲（第63番～第64番）（４手連弾）

［指導上の留意点］

連弾演奏の楽しさの再確認。音域の確認。音楽性及び曲のまとまり。

［学習上の難点］

・中断せずに演奏していく事の難しさを感じる。

・同音連打での指の替えが困難である。

［教育方法］

・８分音符が使用された練習曲で，初めての連弾演奏である。

指導者はバイエル第32番からバイエル第34番の楽譜と，これら２曲の楽譜の比較を学習者に行う。特に指導者の演奏する楽譜の理解を求める。８分音符が導入されたことにより，音楽の表現の幅が広がってきていることを学習者は理解する。

・同一指による同音連打の練習曲を，学習者はすでに経験している。学習者は

「同一音の反復における指の替えは難しいです。」

と感想を述べられる。

右手のみの練習では，同一音上の指の替えはスムーズに進行するが，

「左手が８分音符による伴奏である為，左手の指の動きに気持ちが奪われて，右手の指替えが困難です。」

と感想を述べられる。バイエル第９番との楽譜の比較も行う。

・譜表間が少しづつ狭くなり，印刷されている音符も小さくなってくる。同時に演奏する小節数も多くなる。その為，前述の⑩で述べたように，現在自分が

どの部分を演奏しているのかわからなくなり，演奏を中断するという状態が多くなる。
学習者は
「譜表間がほんの少し狭くなっているだけなのに，楽譜が読みにくくなります。集中力とその上注意力が必要になります。」
と感想を述べられる。

・これらの練習曲は「バイエルピアノ教則本」における第1部の最後の練習曲でもあり，また「子どものバイエル」下巻の前半部分のまとめと位置づけられる。そしてこれまでの練習曲で，以下の傾向が学習者に見られるようになる。
指の動きの複雑な練習曲の場合，8分音符や8分休符等が短くなる。
8分音符を早いテンポで演奏し，演奏の中断という状態になりやすくなる。
音域の広がりのある練習曲は読譜が不正確になる。
「バイエルピアノ教則本」の最終段階（第2部）への学習をスムーズに行う為，バイエル第44番からの復習を行い，上記に見られる傾向を解消していく。

⑬やさしい音階，複音，臨時記号，3連音符，前打音等を含む両手練習曲（第65番～第85番）

［指導上の留意点］
調の確認。3連音符の理解。
［学習上の難点］
・音階練習における左右の指使いに戸惑いを感じる。
・重音演奏における指の動きが困難である。
［教育方法］
・音階練習において重要な点は，指使いや音の響きを演奏者は十分に注意し，調性感を養っていくことにある。学習者は片手づつの音階練習ではスムーズに指の運びは行われるが，両手演奏では，
「左右の指使いが一致していない為に難しいです。」
と感想を述べられる。
音階練習における学習者の学習形態は，次の通りである。
速いテンポで演奏する。
困難な個所を取り出して，部分練習をするという練習方法が少ない。
演奏ミスをすると，いつも曲の最初に戻って演奏を始める。
指導者は音階練習のために，再度鍵盤から離れ，机上練習を行うことを勧める。その際，指番号を言いながら指を動かす方法と，メロディーを歌いながら指を動かしていく方法を指導する。
・重音練習は学習者にかなりの負担となる。2つの音を同時に演奏するこの形は，学習者の指に緊張を与え，学習者は
「とても疲れますね。Legato演奏をするのが難しいと思います。指が思うように動いてくれません。6度の重音練習は，第1指と第5指を一定の間隔で維持していくことが難しいと思います。」
「今までの練習曲で，右手左手を合わせての6度響きは心地よいものでしたが，右手のみの6度の重音練習は，響きを聞く余裕がありません。」
と感想を述べられる。
学習者にとって，重音の響きを感じながらの演奏は困難であっても，響きの重要性を感じていかれるようになる。

⑭16分音符を含む4手のための練習曲と指を早く動かす練習（第86番～第87番）（4手連弾）

［指導上の留意点］
16分音符の音価の理解。
［学習上の難点］
・1拍の音価の把握が困難である。
［教育方法］
・学習者はバイエル第86番で初めて16分音符に接する。この練習曲は全音符→2分音符→4分音符→8分音符→3連音符→16分音符→3分音符→8分音符→4分音符→2分音符→全音符という形で，音価の違いを習得していく。前述の⑨における練習同様に，音の長さを正確に区分しとらえる練習が必要である。
指導者はバイエル第86番の指導時，学習者にバイエル第44番の練習を再度行う。学習者は1つの音符を$\frac{1}{2}\rightarrow\frac{1}{3}\rightarrow\frac{1}{4}$（8分音符→3連音符→16分音符）に移行する時より，$\frac{1}{4}\rightarrow\frac{1}{3}\rightarrow\frac{1}{2}$(16分音符→3連音符→8分音符）と移行する方が困難である。この状態はバイエル第44番でも見られた。指導法は⑨と同様の練習方法を行った。
・学習者は音の長さの取り方が短くなる演奏は容易であるが，長くなる音の取り方は，困難な傾向がある。これは，呼吸を速くすることは容易であるが，ゆっくり意識して遅く呼吸することの難しさと関係すると思える。

⑮8分音符，付点8分音符，16分音符等を含む両手練習

曲（第88番～第104番）

［指導上の留意点］
装飾音符の音価と響きの確認。調性の理解。
［学習上の難点］
・演奏ポジションの移動（手の交差）に戸惑いを感じる。
［教育方法］
・装飾音符は小さい音符で記入されている為，学習者は音符を把握しにくくなる。その為，譜読に誤りが生じてくる傾向が見える。
指導者は装飾音を省いた本音符のみの楽譜を作成し，学習者に指導者が作成した楽譜と，装飾音符の付いた楽譜の演奏の違い，特に響きの違いを認識させて指導する。
・バイエル第100番に現れる手を交差して演奏する演奏法は，前述の⑬のバイエル第80番でも練習している。指導者は両曲の比較を学習者に行う。手の交差について，学習者は
「バイエル第80番は１小節毎に手が交差します。しかしバイエル第100番は４小節毎に手が交差します。その為，手を交差した時，腕が伸びたままの状態になり，体が硬くなります。」
と感想を述べられる。学習者の演奏姿勢は上体を後ろに反らしたような形になり，踵が浮く。この点も注意する。
・ここで，イ調短音階の音階練習を学習者は勉強する。学習者はすでに⑬でイ調長音階を勉強しているので，この音階を復習する。更に指導者はイ短調の練習曲をイ長調に書き換え，両曲の練習を指導する。調性の更なる理解を進める。学習者はこの練習方法には意欲的である。

⑯半音階と半音階の練習曲（第105番～第106番）

［指導上の留意点］
譜読の確実性。半音階進行の響きの認識。
［学習上の難点］
・半音階進行，演奏ポジションの移動により，指使いが不正確となる。
・半音階進行における加線音を読み違える。
［教育方法］
・部分的な半音階進行の練習曲を，学習者はすでに経験している。しかしこれらの最後の２曲は半音階進行を主とする練習曲であり，学習者には半音階進行の楽譜は，非常に読みづらいものとなり，読譜ミスが生じてくる。又バイエル第106番では，学習者の使用する楽譜には，指使いの記入は非常に少ない。その為，学習者が指使いを記入するように指導する。
これらの練習曲では半音階の予備練習を行った上で，演奏に入る。
予備練習としては以下の方法を行った。
鍵盤を離れ，机上での練習を確実に行う。音符を歌いながら，指の運動を行う。
紙鍵盤を使用し，紙鍵盤での練習を行う。
学習者は
「机上，紙鍵盤では，単調な練習・味気無さを感じます。」
と感想を述べられる。
指導者は
「心の中に音色を思い浮かべて，曲のイメージを表現するつもりで，指の練習をしてください。」
と助言する。

II．２．考察

⑨４手のための全音符から８分音符までの練習曲と⑩８分音符による両手練習曲について

ここから「子供のバイエル」下巻に入る。「子供のバイエル」上巻を修了するまでには，かなりの時間を要している。学習者の心に，ピアノ学習に対しての新たな意欲・決意と同時に，学習者がピアノ学習を行うことを決心してから，どうにかここまで続けてこられたという喜びを，指導者は感じる。改めて，「ピアノ学習」の第一目的に返り，演奏することの楽しさを考えてもらうように指導を行う。

「子供のバイエル」下巻から，４分音符を細分化した音符が現れる。音符の区分化を習得していく。学習者は楽譜を視覚的にとらえて，８分音符が使用されている曲は，長い曲を演奏していると感じる。

バイエル第48番とバイエル第49番を比較した場合，小節数は同じである。学習者の使用する楽譜では，第48番は１ページ内に，第49番は２ページ内に収まっている。２ページを演奏するということから，学習者の心の中に長い曲を演奏する，間違わないで演奏をしなければという気持ちが生まれる。勿論，学習者自身は両曲が同小節数であることは理解されている。楽譜のレイアウトにより，心理的影響はかなり左右されることが理解できる。

⑪低音部記号。低音部記号と高音部記号の楽譜の比較と⑫4手のための8分音符の練習曲について

ここまで到達すると，学習者自身に，ピアノ学習に余裕が見られるようになる。各練習曲に記されている速度記号，発想標語等，楽語の勉強も積極的になる。

学習者はピアノ学習について，それぞれの習得時点で様々な意見を述べられてきた。ここでは学習者にとって何が一番大切であるかを記する。

「老人，高齢者が何か新しいものを習おうとする時，家族の励ましが一番大切です。」

「簡単に演奏できないから，焦らず，ゆっくりと練習した方がいいよという家族からの助言が嬉しく，ピアノ学習への張りになります。」

「時間を忘れて何かに集中できる。年をとってから，何かに集中できるということを発見できたのは嬉しいです。」

指導者はこれらの話を聞き，ピアノ学習者の家庭での練習状況を感じとることができる。

前論文のIII－2で述べたことに関連するが，指導者は学習者の素朴な質問に，真摯な態度で接しなければならない。例えば指の替えの問題である。⑫の教育方法でも述べているように，ピアノ学習者にとって指の替えは困難である。学習者は

「同じ音を続けて演奏する時，何故指を替えて演奏をしなければいけないのですか。第1指→第2指→第1指と，同一音で指を替える場合，第2指は第1指の上に置いて演奏するのか，それとも下に置いて演奏するのですか。」

と質問される。指導者側は当然のこと，何故そのような質問が発生するのかという思いが心に浮上する。指導原点を，目線をどこに置いて指導するのかということを忘れてはいけない。

⑬やさしい音階，複音，臨時記号，3連音符，前打音等を含む両手練習曲について

バイエル第65番からバイエル第85番までの練習曲で，習得していかなければならない内容は豊富である。この部分で習得すべき項目を以下に挙げる。

音階練習(ハ長調，ト長調，ニ長調，イ長調，ホ長調)
臨時記号の理解（半音階）
重音の練習（3度音程，6度音程）
3連音符
装飾音符（前打音）

学習者は新しいテクニックを自分のものにしていかなければならない，というあせりが少しずつ現われる。しかし学習者自身が

「あわてず，ゆっくり確実な勉強が必要ですね。」

と感想を述べられる。

ピアノ指導を始めてから，学習者と指導者の間には目に見えない信頼関係が存在してきた。相互のコミュニケーションが存在してくるので，

「自分だけが苦しいのでなく，ピアノ学習者は誰でもこの不安とあせりが存在します。」

と指導する。そして学習者の習得へのあせりも徐々に解消していく。この部分では，学習者は多くの新しい音楽知識を得ることになる。1つ1つ理解を確実にしていくという指導を心がける。

⑭16分音符を含む4手のための練習曲と指を早く動かす練習と⑮8分音符，付点8分音符，16分音符等を含む両手練習曲と⑯半音階と半音階の練習曲について

「バイエルピアノ教則本」の最終段階に位置するこれらの練習曲で，学習者は今迄以上に，新しいテクニックの習得を行う。1つの練習曲のなかに，様々なテクニックの要素が導入されている為，1曲毎の習得に時間を要するようになる。音楽的内容にも幅のある練習曲に出会うことになり，学習者は自分が得意とする・不得意とするタイプの曲と色分けされる。

学習者の気持ちには，この本を修了したら次はどの曲を練習するのか，という期待感が心に存在し，早くこの曲を仕上げたいという気持ちが先走る。しかし，半音階の練習曲には，臨時記号の多さに学習者は戸惑いを感じながらも，

「演奏することを躊躇してしまいますが，しかし，譜読みができた段階で，大きな喜びに変わっていきました。」

と感想を述べられる。

II．3．指導の総括

指導者が学習者へのピアノ指導を振り返って見ると，この高齢者にピアノ学習指導中，学習者自身の中に，様々な事が起こったと感じる。個人的・家庭的な事象に，どこまで踏み込んで対話及び指導すべきかいつも念頭にあり，指導者自身，このピアノ学習を指導し続ける事ができるか，最初は不安が存在した。今まで，様々な機会で指導者自身より年齢の上の方の指導・アドヴァイスをする機会はあったが，ある一定期間，継続して指導すると

いう経験を持たなかった。この指導では高齢者に一対一で接し，第三者の人々を交えず，失敗しても恥ずかしい思いをできるだけさせず，堅苦しい気持ちも持たせずに，リラックスを心がけた。

ここで学習者の感想を述べることにします。

「ついに「バイエルピアノ教則本」をやり終えることができたという満足感・充実感を感じ，又新たな決意，次へのステップが生まれてきます。自分がこの年齢で「バイエルピアノ教則本」を勉強し終えることができたことに喜びを感じます。」

このような言葉を聞くと，指導者の中にも指導し終えたという充実感と満足感が生まれてくる。そしてこのピアノ学習に対する指導原点は，“指導”するという事の持つ意味は指し示して導くのではなく，高齢者及び学習者より指し示されて導かれていく事ではないかと考えられる。一般に学習者と教育者とは表裏一体であり，いつも逆の立場に成りうる要素を保有し，又確実に生徒・教師はその様な関係であるべきと考える。何かをやり遂げたという成功体験は，次の人生ステップへの励ましとなり，全ての生涯学習にあてはまると考える。

一対一で指導を行う過程・研究は前論文でも述べたので，もう一方の考えをここで述べてみる。

ある新聞によれば以下のことが述べられていた。

『ピアノが弾けたらいいなあ，というあこがれはあっても，習いに行くのは恥ずかしいし，堅苦しそう…。多くの人が，こんな思いをしたことがあるはずだ。だが，パソコンやゲーム機などのデジタル機器があれば，大丈夫。うまく弾けたら画面の先生がほめてくれるピアノ練習ソフトが相次いで登場しており，ピアノを楽しく学べるのだ。』[3]

このように，コンピューターの発達がピアノ学習者の教師対生徒の関係を覆す可能性があると思う。ピアノの先生はコンピューターという時代が，もうそこまで来ていると感じる。

III．あとがき

III．1．音楽教育と生涯学習

『「かけ算できた？」「次はボタンつけをやってみよう」。明治元年創立の市立小千谷小学校。担当教諭と一緒に教室で生徒に声をかけて回るのは母親たちだ。月に一度，五時限目に設けられる「学習参加日」の授業。算数や生活科などすべての教科の指導に「教師と対等の立場で」参加する。参加率は多いときで母親全体の八割，七百四十人余りにもなる。共働き家庭の母親たちは仕事を数時間休んで教室に通う。都合のつかない母親に代わって祖父母や父親が現れることもある。』[4]と，最近の教育現場からの報告が存在する。このようなことが小中学校の音楽教育の現場にも現れることを願うのは筆者だけではないと思う。

120年程前，西洋音楽の学習という原点はどのような環境であったのか，少し振り返ってみることにする。

日本のピアノ音楽の歴史はメイソン（*Mason, L.W.* 1818－1896）から始まったと言っても過言ではないだろう。明治初期，和魂洋才及び富国強兵の掛け声のもと，他の西洋技術と同様に，日本に西洋音楽が導入され，音楽教師育成という主目的のもと，1879年に東京芸術大学の前身である“音楽取調掛”が創設された。そして，“指導書”という明確な意識の教則本が，そこで初めて使用された。

つまり，この論文で述べているピアノ学習指導者の為の「バイエルピアノ教則本」が，そこで研究され，指導書となったと思われる。ドイツのピアノ学習書がアメリカ合衆国経由で，我が国に普及した。日本の西洋音楽導入の発展過程を考えると，ヨーロッパ経由の音楽導入でなく，アメリカ経由を考える時，それは，ヨーロッパにおける伝統音楽の精神が，建国まもないアメリカの音楽の歴史・教育方針として，直接よりも間接導入の方が容易であろうと，明治の我々教育者の先達が考えたと推察できる。そしてそのような「バイエルピアノ教則本」の導入により，小学校唱歌の指導へと発達した。実際，お雇い技術・教育者は，イギリス及びドイツ等のヨーロッパ諸国の人々に委嘱するのが多数であるが，「青年よ，大志を抱け」のクラーク（*Clark, W.S.*1826－1886）のアメリカ教育の方法が，日本に容認され，開国日本とアメリカ建国の精神が一致したのだと推察する。それは音楽教育にも通じると思う。教育学部が明治学制以来の大幅な変更を余儀なくされている今日，開国と新しい指導者の養成とが，明治の気骨精神が，胸に響くように，我々が心がけねばならない教育・研究者の役割ではないかと考える。

生涯学習というこの言葉に違和感を持たない気持ちを所有している人が，教育機関に携わっている人の中にも増えてきているのは事実であろう。しかしながら，この言葉はまだ一般社会の中では，市民権を得ていないと思われる。予備の教育システムとしてしか捕えられていないし，我々学生を教えている者でさえ，卒業生を世に送り出してしまえば，それで教育は終了したと考えている人が多い。我々の役割は，生涯にわたって，教育・学習

を受けたいと考える人々に，その支援システムを構築することではないだろうか。この小論が，高齢者とピアノ学習という観点から，上記の問題に一視点を与えることを願っている。

III．2．音楽教育の存在意義

現在のわが国の生涯学習ブームは，1992年5月に文部省高等教育局にリフレッシュ教育（*refresher education*）についての係りが設置され，生涯学習，継続教育，リカレント教育，リフレッシュ教育といった概念が構築され，それらが議論される土台が出来上がった。

この論文では，「バイエルピアノ教則本」を教材として，その改良版を高齢者に使用し，学習記録の研究を行った。筆者の「バイエルピアノ教則本」の研究は，高齢者を念頭に考察したが，児童・生徒の初等ピアノ学習においても効果があると考え，彼らを指導する教育学部ピアノ専攻の学生指導書・テキストとしての一面もある。今後の指導書の存在意義は，ピアノ指導書，生涯学習の為のテキスト，母親が我が子の為に使用する等，種々の多目的の側面があると思う。

ここ数年来，全国の教員養成課程において，教育学部の全面的改組が叫ばれてきた。又筆者の勤務する大学においても，1997年度より，具体的審議が活発化し，まさに進行中である。その目標とする点は，筆者の考えでは，

1．生涯学習性
2．教員の充足性
3．専門性

の3本柱が，重要な論点となっていると考える。そして，教育学部という言葉の意味は，我々ピアノ指導・研究者間でも，複雑化してきている。ここでは，生涯学習・教員養成・専門家の育成（筆者の場合，ピアノ教師，指導者，ピアノの普及活動家，他の楽器の伴奏者として，これらの言葉を使用することにする）として，音楽教育の存在・意義を述べることにする。

存在・意義は自分自身の生き方とも密接に関わることであり，筆者のライフワークである学生指導とピアノ演奏の研究の両面が存在する。教育学部において私たちピアノ指導者・研究者が持ち続けるべき課題は，どのように学生を指導し，その学生がどれだけ社会に貢献できるかということであると思う。特に筆者の場合は，ピアノ学習を通じて，特にこの論文では，生涯学習者用のテキスト教材の考察を心がけている。つまり，

教員養成 ＋ 生涯学習 ＋ 専門性

この三点を念頭に，この研究成果を論じている。「バイエルピアノ教則本」に述べられている内容の研究をする意義は，上記の三点を融合することにほかならないと考える。

教育と国家の人材育成については古来，種々の人々によって論じられている。ここでは古代ギリシャの著作より抜粋し，論じてみる。

『音楽・文芸による教育は，決定的に重要なのではないか。なぜならば，リズムと調べというものは，何にもまして魂の内奥へと深くしみこんで行き，何にもまして力づよく魂をつかむものなのであって，人が正しく育てられる場合には，気品ある優美さをもたらしてその人を気品ある人間に形づくり，そうでない場合には反対の人間にするのだから。』[5]

『それでは，僕が言いたいのはこういうことなのだ。――神々に誓って，音楽・文芸の場合もそれと同じように，われわれ自身にしても，われわれが国の守護者として教育しなければならぬと言っている者たちにしても，節制や勇気や自由闊達さや高邁さやすべてそれと類縁のもの，他方またはそれと反対のものの実際の姿が，いろいろとくり返し現れるのをあらゆる場合に識別し，それらが内在しているあらゆるもののうちに，その実際の姿をも似姿をもともに認識できるようになるまでは，そして小さなもののうちにあろうと大きなもののうちにあろうと，けっしてないがしろにせず，いずれを知るにも同一の技術と訓練を必要とするものだと考えるようになるまでは，われわれはけっして，音楽・文芸に習熟した者となったとはいえないのではないだろうか？』[5]

『してみると，音楽・文芸と体育とを最もうまく混ぜ合わせて，最も適宜な仕方でこれを魂に差し向ける人，そのような人をこそわれわれは，琴の絃相互の調子を合わせる人などよりもはるかにすぐれて，最も完全な意味で音楽的教養のある人，よき調和を達成した人であると主張すれば，いちばん正しいことになるだろう。」「たしかに当を得たと主張といえましょう，ソクラテス」と彼は言った。』[5]

長い引用になったが，このプラトン（*Platon*前427－前347）の「国家」で論じられている哲学は，我々教育・研究者が持続すべき，忘れてはならない「心の文化」だと思う。そして，これこそが教育学部の存在・意義ではないだろうか。

1997年12月に，大学審議会より文部大臣に答申された「高等教育の一層の改善について」[6]の内容を以下，抜粋し，この論文の結びとする。そこで述べられている要点は，高等教育を取り巻く状況の変化として，

1）高等教育の普及とそれに伴う変化，

2）学問の進展，
3）社会・経済の変化，
4）生涯学習ニーズの高まり，

が挙げられている。つまり，先程，筆者が述べた教育学部の専門性，教員養成，生涯学習の三点が，項目1）～4）の論点でまとめられている。これからも判断・推察されることは，答申でいわれている『高等教育を取り巻く状況の変化は著しく，高等教育に対する社会の期待もますます高まってきている。こうした状況を踏まえ，各大学等の高等教育機関が，それぞれの理念・目標に沿って更に改革を進め，充実を図ることが期待されている。』ことが重要であり，我々教育・研究者に課せられた責務であると考える。

なお，この調査・研究の一部は，平成8年度の文部省科学研究費の補助金基盤研究(c)（代表者　吉名重美）によって成された。

脚注

＊II章で考察したピアノ学習者（高齢者）のプロフィールに関しては，引用文献7を参照。

引用文献

1．吉名重美著：生涯学習としての音楽教育に関する基礎的研究II．島根大学教育学部紀要第31巻（教育科学編）17～29頁，1997年．
2．バイエルピアノ教則本（Beyer Vorschule im Klavierspiel Opus 101）音楽之友社，1972年
3．日本経済新聞：ピアノの先生はコンピューター　1998年7月25日（土曜日版）
4．日本経済新聞社：女たちの静かな革命．142頁，1998年
5．プラトン著，藤沢令夫訳：国家（上）岩波文庫　218頁，220頁，244頁，1996年
6．大学審議会：高等教育の一層の改善について（答申）平成9年12月
7．吉名重美著：生涯学習としての音楽教育に関する基礎的研究I．島根大学教育実践研究指導センター紀要　第6号，39～51頁，1996年